



重友毅

近世文学論集

文理書院

重友毅著作集第五卷

近世文学論集

定価三五〇〇円

一九七二年九月三〇日初版第一刷発行

著者重友毅

発行者畑太郎

発行所株式会社文理書院

東京都文京区関口一―五郵便番号一一二  
小石川郵便局私書箱二四号

電話東京二六八局四一一番振替東京七六一三四

印刷所明和印刷株式会社

製本所山田製本株式会社

## はしがき

本書に収めた論文のうち、最も古いのは大正年代、二十代の始めの筆になるもので、それから今日に至るまで、既に五十年の歳月が流れている。その間には、学界はもとより、それを大きく包む国内・国外の情勢にも、おどろくべき変化があった。学問もまたそれに応じて、これに対処する姿勢を取らなければならなかったが、始めの頃はいつさいが夢中で、すべて手探りの覚束なさで進むよりほかはなかった。

しかしそのうちにも、まず事実の究明が先務だという気持が動き、それに全力を傾ける時期が訪れて、これが相当の期間つづいたのは、当然といえば当然のことであつた。だが、そこにやがて疑いの念が生じた。事実の究明が先務だとはいうものの、その事実にも著しい価値の高下がある。これを無差別に究めてみたところでは始まるまい。第一、そのような仕事の空虚さに堪え切れなくなったというのが実情であつた。そこから改めて、古典とは何か、学問とは何かを、問い直さなければならなかった。もとより事実の究明は旧の通りで、これを離れた問題の追究は、不可能でもあれば、無意味でもあるが、しかし重点はおのずから価値評価の方へと移って行つた。そしてそれには、退いて自己のうちに、評価の基準を設けることが先決となる。こうしてそこから、それまでにも心がけなかった、内外の古典に広く目をさらすことに、一段と努

めることになった。

そういう態度の変化の跡は、この書に収めた論文からも辿れることと思うし、それには各文末に記した執筆年次（あるいは発表年次）が参考になると思う。同時にこの年次は、その時々々の学界の動向とも関係があり、その折々に提起された問題で、当座は熱心に論議されながら、やがてうやむやに消え去ったものに対しても、重要と思われる限りは、これにはっきりした結論を出しておいたが、これらのことも、やはりこの年次が、その辺の消息を伝えてくれることと思う。

ただし、これらの論文は、本書に収めるに当っては、執筆年次に関わりなく、題目の共通するものをまとめて掲げることにした。第一篇は、近世文学を全体として見たもの、第二篇は、興味をもった作家・作品に関するもの、第三篇も、これと性質が違うわけではないが、比較的軽い気持で筆を執ったもので、これらは著作集の他の巻で、西鶴・芭蕉・近松・秋成を論じたため、結果として後期のものに偏ることになった。第四篇は、古典論、もしくは学問論ともいふべきものである。附録は、近世の領域外に関するものをあつめた。他日時間が許せば、これらの方面にも筆を進めたいと思っている。

昭和四十七年八月

重 友 毅

近世文學論集 目次

はしがき

一

第一篇

近世小説研究史

二

近世文学の特質

三

元禄文学の基盤

四

近世文学史の構想

五

第二篇

近世文学の胎生

六

読本の発生と展開

七

京伝・馬琴の対立と江戸読本の成型

八

馬琴読本の主題と構想

九

六樹園の雅文笑話

一〇

六樹園の雅文小説

二〇六

風来山人の戯作

三三四

京伝の黄表紙

二七四

洒落本・滑稽本・人情本

二八二

『膝栗毛』について

二九九

三馬の滑稽本

三七七

### 第三篇

綾足の生涯

三三三

『棧道物語』について

三七二

蕪村の写生句

三八〇

一茶の郷里を訪ねて

三八四

「いき」について

三八八

江戸文学の特性

三九三

欠陥の魅力

三九九

第四篇

古典研究の目的

四〇七

古典の本質

四二七

古典研究の意義

四二五

古典の受容について

四四六

附録

『土佐日記』の史的地位

四六三

『枕草子』の随想性

四八一

兼好の自画像

五〇一

直哉の「白い線」

五二三

索引

五三二

近世文学論集



# 第一篇



# 近世小説研究史

## 一

近世小説研究の日はなお浅い。それが始まったのは、明治に入ってからのことである。

しかし明治以前にも、すでにその萌芽は見られるのである。今、その大体の目を挙げると、作家・小説一般については、曲亭馬琴の『近世物之本江戸作者部類』（天保五年）、木村黙翁の『国字小説通』（嘉永二年）及び『京授戯作者考』（前者に次いで成ったものであるが、年代未詳）、撰者未詳の『戯作者撰集』（年代未詳）、岩本活東子の『戯作者小伝』（『戯作者撰集』の中より抄出したもの、安政三年）および『戯作六家撰』（安政三年）等があり、黄表紙については、蜀山人の『繪草紙菊寿草』（天明元年）および『神史岡目八目』（天明二年）、撰者未詳の『江戸土産』（天明四年）、同じく撰者未詳の『戯作外題鑑』（文化年中と思うが、年代未詳）等、洒落本については、十文字舎自恐外二名の『戯作評判花折紙』（享和二年）等、読本については、曲亭馬琴の『ていふん聊軒』（年代未詳）『をこのすさみ』（年代未詳）『おかめ八目』（文化十年）『本朝水滸伝を読む並批評』（天保四年）『稗説虎之巻』（天保十四年）、殿村篠斎の『大夷評判記』（文政元年）等々が出ており、この外随筆類や著述の序跋等にも、解説・考証・批評・感想といったものが見えているが、多くは作者・書肆または小説愛好者が、

一時の備忘か好事の余に出たものであり、同時代人の批評として、大いに参考とする価値はあるものの、中にはまた不純な気持から成ったものも交るという風で、概していえば、まだ「研究」の名に値するものはないといつていいが、しかしそれが後の研究に、重要な資料として取上げられたことは、いうまでもないのである。

すべての場合がそうであるように、人物なり作品なりが、比較的公平な取扱いを受けるには、そこに相当の年月の隔りが必要とせられる。近世の作家・小説が、明治に入つてようやく研究の対象として取上げられたのも、むしろ当然のことといつていい。しかしこの場合、そこに作用したものは、時の力のみではなかった。そのみであつたなら、その研究はもっと遅く開始せられたであらう。理由というのは外でもない。近世以来、ひとり小説に限らず、文芸作品の多くが、甚だしい蔑視と迫害とを蒙つて来たことである。この偏見が除かれることなしには、苟くもそれが学者の「研究対象」として取上げられることは、到底望まれなかつたであらう。そしてこの間にあつて、この迷妄を破つて、小説の地位の高く認められるべきを説いたのは、実に坪内逍遙博士の『小説神髓』（明治十八年—十九年）であつた。

明治文学史における『小説神髓』の地位については、ここに贅説するまでもない。またその刊行当時における、一般人士の小説・戯曲に対する態度、並びにこの書の与えた影響の一端については、かつて幸田露伴博士が「早稲田文学」二二九号に「明治初期」と題し、また市島春城氏が同誌二三三号に「明治文学初期の追憶」と題して述べられたところによって、窺ひ知ることが出来る。

いうまでもなくそれは、主として西洋の（それも英国の）文学評論の影響に成つたものであり、（宣長の源氏物語論をも受け継いでいるが）、当来の小説のあるべき相を説いて、欧土のノベルに倣い、進んでこれを凌駕すべきを説いたもので、直接わが近世小説の攻究を目的としたものではなかったが、しかしそこに

近世の作家・小説、ことに馬琴に対する攻撃が記されていることは、普く知られている通りである。そしてそれは、小説の本旨を説いて専ら人情世態の模写にありとする著者の主張から、当時の小説家が、いたずらに馬琴を「本尊」とし、あるいは春水に心酔し、種彦を崇めて、その糟粕を嘗めている状態にあるを醒ますべく、おのずからにして攻撃の鋒先が、その代表者たる馬琴に向けられたためであった。すなわち著者にとって、模写小説の提唱は、勸懲小説の排撃と相表裏するものであったのである。

こうしてそれは、近世小説の研究を主眼とするものではなかったが、その馬琴論は後に影響することが大きかった。すでにそれだけでも、これを反駁して、馬琴の擁護論を唱える者の出現を導くべき原因を作っていたともいえるが、さらにそれよりも注目すべきは、この書が現われてから、小説の地位に対する一般の評価のようやくに高まつて来たことである。それはやがて、いたずらに輕侮の的であった近世小説を、改めて研究の対象として取上げようとする傾向を導くものであった。

## 二

関根正直博士の『小説史稿』（明治二十三年四月）は、こうして生れ出た研究書の最初のものであったと思われる。それが『小説神髓』の影響下に成ったものであることは、書名の類似によつても、また著者が当時坪内博士と交遊のあったことからしても察せられるが、さらに本書の終りに、近世小説の卑しめられ来たことを説いて、「さても昔は学者の攢斥したりしもの、今は却て学者の任とし、凡そ文学に携はる者の、小説かかぬはなき程なる、世の変遷こそ不測なれ。殊に小説は、文学美術の上乗なるものとかいふ説ありて、昔時に比しては、其品位極めて高上になりしなり。あはれ世の小説家、益々意匠を鍊り、文章絵画にも注意

したらんには、盛代の文学美術に光輝を増さん事疑ひなし」といつていることなどによつても知られるのである。

ただし本書は、近世小説のみについて論じたものではなく、時代を、一、公家世盛りの時代、二、鎌倉將軍の時代、三、室町將軍の時代、四、江戸將軍の時代と分けて、各時代の小説全般に亘つて説いているのであるが、最後の部分に力点が置かれていることは明らかである。さらにその「小説」という意味も、始めにその種類を分つて、一、巷談、二、巷談を本として一部の趣向を構えしもの、三、史伝の事蹟を敷衍潤色せしもの、四、作者の肚裏より出でて所謂空中に樓閣を構えしものの四つとし、謡曲の如きをも、その二および三に該当するものとして、なお小説の一種と定めている如く、かなり広い意味をもつたものであり、したがつて近世における浄瑠璃正本・院本・演劇脚本等をも、小説と見て論じている。

こうして著者は、「江戸將軍の時代」の始めに、「小説伝統」なる図表を掲げて、上代より徳川時代に至る小説の系統關係を示し、本文に入つて、物語・浄瑠璃正本・院本（五段）・実録体・御伽草子・草双紙・滑稽本・浮世草子・小本・読本・演劇脚本・正本製・人情本の順に、その各々について、あるいは代表的述作を挙げてその梗概を説き、あるいはその作者・刊行年代に触れ、または製本の形式を説いてその変遷に及び、時に文例を示し、挿絵をはさみなどして、簡単な解説を施している。

しかしその説くところは、多く近世の隨筆類に拠つたものの如く、記述そのものも隨筆風であることを免れない。それぞれの取扱いぶりにも、江戸人としての著者の好みの窺われるものがあり、草双紙などに比較的多くの頁を割いているのである。またしばしば禁忌のことに触れているのは、著者の道義的立場を思わせるものであり、この態度は西鶴の浮世草子をも、単に当時の風俗を窺う上の好資料として認めるにとどまり、また三馬・一九の比較に、その文字の猥雑卑陋に互るものの多きを理由として、一九を貶していることなど